



Data

監督: ケン・ローチ
 出演: クリス・ヒッチェン / デビ
 ー・ハニーウッド / リス・ス
 トーン / ケイティ・プロクタ
 ー / ロス・ブリュスター /
 チャーリー・リッチモンド /
 ジュリアン・アイオンズ / シ
 エラ・ダンカリー / マクシ
 ー・ピーターズ / クリストフ
 アー・ジョン・スレイター /
 ヘザー・ウッド / アルベル
 ト・ドウンバ

👁️👁️ みどころ

英国の巨匠ケン・ローチ監督が再び引退宣言を撤回してまで本作で描いたのは、フランチャイズ制の宅配ドライバー。弁護士は皆「一国一城の主」を夢見るし、それが可能な身分(?)だが、さて本作の主人公は?

勝つのも負けるのも自分次第。それは囲碁・将棋そして相撲・野球・ゴルフ等の勝負の世界では共通し徹底しているが、本作の宅配ドライバーもそれと同じ・・・?今やマルクス・エンゲルスの『資本論』の時代ではなく、労働者(階級)の保護を呪文のように唱える主義主張も古臭いが、さあ、ケン・ローチ監督の視点は?

本作の結末をどう考えるかは、あなた次第。70歳の私は好きなことを好きなようにやってきた個人事業主として消えていくだけだが、さて先行き不安な今の時代、若者たちはサラリーマン(労働者)を選ぶの?それとも、どこまでも自己責任が付きまとう、独立した個人事業主を選ぶの?本作からそれをじっくり考えたい。



■□再び引退を撤回! そんな巨匠の問題意識は? ■□

1931年生まれの子の日本の巨匠・山田洋次監督は『男はつらいよ 50 お帰る寅さん』(19年)で2020年のお正月を飾ったが、1936年生まれのイギリスの巨匠ケン・ローチ監督は『ジミー、野を駆ける伝説』(14年)、『シネマ35』未掲載)を最後に引退を宣言した。ところが、イギリスや世界各国で拡大し続ける格差や貧困の問題を目の当たりにした彼は、敢然と引退宣言を撤回して、『わたしは、ダニエル・ブレイク』(16年)、『シネ

マ40』38頁)に挑戦し、同作が2016年の第69回カンヌ国際映画祭で2度目のパルムドール賞を受賞したのを最後の花道として「引退する」と発表した。ところが、何と彼は再びそれを撤回して本作に挑戦！引退宣言の撤回は韓国の鬼才キム・ゴドク監督も「前科一犯(?)」だから、私にはそれを責める気持ちはないが、2度も引退宣言を撤回して本作に挑戦したことにはビックリ！それは一体なぜ？そして、彼の問題意識は一体ナニ？

『わたしは、ダニエル・ブレイク』の時の彼の問題意識はフードバンクだったが、本作のそれは、フランチャイズの宅配ドライバー。フードバンクも宅配ドライバーも資本主義が大きく成長(変容?)し、民主主義や自由主義についてもいわゆる「新自由主義」の時代に変化していく中で生まれたもの。そんな新しい民主主義、自由主義、資本主義の時代の資本家v s 労働者の関係(対立?)は、マルクスやエンゲルスの『資本論』では到底解釈できなくなっている。もっと直近で言うと、今の日本では「働き方改革」の議論が盛んだが、ドローンの進歩やAIの進歩は急速に人間の働き方を変えたとともに、人間の「職場」を奪っていくはずだ。そんな中、人間はAIとどう向き合い、協調、共存していくかという新たなテーマが生まれているが、本作でケン・ローチ監督が向き合ったのは宅配ドライバー。

本作は、建設に関してもあらゆる職種をこなしてきたと語る職人リッキー(クリス・ヒッチェン)が、これからはフランチャイズシステムの宅配ドライバーとして生きていく決心をするシークエンスから始まるが、その是非は？

■□■彼の問題意識は労働者(階級)のあり方！だがしかし？■□■

ケン・ローチ監督は、電気工の父と仕立屋の母を両親に持つ「労働者階級」の息子だが、高校卒業後に2年間の兵役に就いた後、オックスフォード大学に進学して法律を学び、卒業後、劇団の演出補佐を経て、63年にBBCテレビの演出訓練生になり、66年の『キャシー・カム・ホーム』で初めてTVドラマを監督したという経歴だから、彼自身は労働者階級ではなくエリート。しかし、1967年に『夜空に星があるように』で長編映画監督デビューを果たした彼は、その後ずっと労働者や社会的弱者に寄り添った人間ドラマを描いてきた。その集大成とも言うべきものが『わたしは、ダニエル・ブレイク』であり、本作だ。

日本は天皇を象徴とする東洋で最も変わった国だが、イギリスも民主主義の先進国ながら女王陛下が君臨する変わった国。それに対して、移民によって建国された新天地であるアメリカは全く異質の国だ。第2次世界大戦まではイギリスが世界をリードする大国だったが、大戦後はその地位はアメリカに移り、東西冷戦の時代もそれが終結した後も、つい最近までアメリカが「世界の憲兵」としての役割を果たしてきた。同時にアメリカは世界経済の牽引役としての役割を担い、資本v s 労働のあり方においても、株や投資を含む金融の面においても、アメリカ流がすべてを支配してきた。1980年代のレーガン(米)、

サッチャー（英）、中曽根（日）を代表とする新保守主義がその典型だ。そして、2017年以降のトランプ政権はそれを更に変容させながら、新しい世界の市場、貿易、金融のシステムを構築しようとしている。そんな中、今先進国で現実に行き詰っている最大の問題は、格差の広がりであり、貧富の差の拡大。そう言われている。そして、ケン・ローチ監督はその論者の筆頭だ。

他方、そんな考え方（主義主張）に完全に同調し、ケン・ローチ監督を「最も尊敬している」と語るのが『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）で第71回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した是枝裕和監督だ。NHKの『クローズアップ現代+』は2019年9月17日「“家族”と“社会”を語る」というテーマで是枝裕和監督とケン・ローチ監督の対談をはじめて実現させているので、これは必見！同番組は『わたしは、ダニエル・ブレイク』のラストで主人公が最後に語るセリフである「私はダニエル・ブレイク。人間だ。犬ではない。当たり前な権利を要求する。敬意ある態度というものを。私はダニエル・ブレイク。1人の市民だ。それ以上でも以下でもない。ありがとう。」と語るシーンを結びに使い、「“すべての人に尊厳” 巨匠の信念」とまとめている。『わたしは、ダニエル・ブレイク』では、主人公は自らの尊厳を守るために“ある行動”をとったが、さて本作では？

いやいや、いきなりそんな結論に至ってはダメ。まずは、どのように考えてリッキーが宅配ドライバーの仕事に就くことになったのか、から・・・。

■□リッキーの考え方は？妻の意見は？結論は？是非は？■□

本作は、冒頭のリッキーのモノローグによって、近年のイギリスの労働者階級が置かれた経済状況を端的に説明させている。リッキーはケン・ローチ監督のどの作品でも共通した主人公として登場する、真面目で勤勉な労働者。彼は、家族思いで夜遊びも浮気もしないから、人間としては優等生だ。しかし、21世紀に入った今の資本主義は、マニファクチュア時代の資本主義でも、女工哀史の時代の資本主義でもないから、労働者階級だって人並みの欲望を持っているのは当然。そのため、彼はマイホームのために住宅ローンを組んでいたが、10年前の銀行の取り付け騒ぎで住宅ローンが流れ、それまでやっていた建設業の仕事も失い、その後は職を転々としながら懸命に働いてきたらしい。そんな今の彼の正直な気持ちは、「安い給料で人に使われるのは、もうウンザリ」ということ。そのためには、やっぱり独立しなければ！

そんな中、本作ではリッキーがフランチャイズシステムの宅配ドライバーとして独立するか否かを決めるため、フランチャイズ本部のマロニー（ロス・ブリュースター）と協議するシーンが登場する。このシーンは、私が坂和総合法律事務所の所長としてイソ弁や事務員採用のために面接するシーンと同じだが、そこでは雇う側 v s 雇われる側の立場がハッキリしている。そして、そこでの雇う側の狙いは決して搾取ではなく、あくまで現状の

労働法制下で最大の効率を上げること。そのために優秀な人材に来てもらいたいと考えているわけだ。したがって、本作でも契約するかどうかはあくまでリッキーの自由。本作のストーリー展開の中で冷酷非道な男の代表のように描かれている男・マロニーが、そこで言っているのは「勝つのも負けるのもすべて自分次第。できるか？」という至極当然のことだ。それに対して、リッキーは「ああ、長い間、こんなチャンスを待っていた」と答えたが、そこでのリッキーの表情は期待やうれしさと同時に不安も隠しきれていない。しかし、私に言わせれば、サラリーマンになるか、小さいながらも独立して事業主になるかは、それぞれ一長一短があるもの。サラリーマンになれば病気になってもある程度の保証はあるし、引退する時には退職金がある。しかし、独立すれば、いくら一国一城の主だと言っても病気で倒れれば何の保証もないし、仕事にありつけなければ収入もない。それは当然のことだ。したがって、どちらの人生を選んでもリスクがあるのは当然だ。

本作では、帰宅したリッキーが、パートタイムの介護福祉士として働いている妻のアビー（デビー・ハニーウッド）に事業のシステムを説明し、本部の車を借りるより、買った方が得だと説得する姿が興味深い。その結論は、アビーの車を売って新車を買ひ、1日14時間週6日、2年も働けば夫婦の夢のマイホームが買えるということになったが、その是非は？

人はともすれば結論が出てから「ああ、やっぱり〇〇の方がよかったのに・・・」と言うが、私はこの手の結果論が大キライ。それは、きっとケン・ローチ監督も同じはずだから、この時のリッキー、アビー夫婦の相談とそれを前提としたリッキーの決断にケチをつけるのはイヤだが、結果的に見れば・・・？

■□■忙しければ家族はバラバラ？そんなバカな？そうかも？■□■

本作を観ていると、フランチャイズ制での宅配ドライバーの仕事ぶりがよくわかる。日本では、かつてローソンのフランチャイズ制のあり方が問題になったし、近時はセブンイレブンの24時間営業のあり方を巡るフランチャイズ制の問題点が議論されている。「正月くらい休ませろ」の言い分はわからなくもないが、弁護士業務を一生懸命にやっていた時の自分のことを考えると、「自営業のくせにそんな甘いことを言うな！」と反論したくもなってくる。また、私は将棋や囲碁が大好きだが、あの「実力がすべて」「順位がすべて」の世界を見ていると、その厳しさがよくわかる。そして、それは相撲でも野球でもゴルフでも生身の肉体ひとつで個人事業主として働き稼ぐ仕事を選んだ以上は同じ。それらはすべて「結果がすべて」の稼ぎ方だから、「正月くらい休ませろ」と誰かに文句を言っても全く無意味なわけだ。ちなみに、たった1人で司法試験の勉強をやっていた時の俺の正月は・・・？

しかし、本作ではリッキーの忙しさが増すと共に、自動車通勤からバス通勤に切り替えざるを得なくなった妻アビーの忙しさも増していったらしい。そして、そんな忙しさの中、

家族の結びつきの時間が減少するにつれて、思春期にある16歳の長男セブ（リス・ストーン）との関係がおかしくなっていく姿が描かれる。それまではセブも、12歳の妹のライザ・ジェーン（ケイティ・プロクター）もそれなりの優等生だったのに、なぜセブは？学校をサボって“グラフィティ”と称する壁への落書きに夢中になっているセブが、ペンキを買うために両親が買ってくれた高価なジャケットを勝手に売ったのは、かなり行きすぎた“非行”。しかし、「成績もトップクラスなのに、どうした？」と詰め寄る父の怒りに、セブはまともに答えようとしなから、アレレ。この一家の崩壊は早くもここまで来ているようだが、その打開策は？忙しければ必然的に家族はバラバラに？そんなバカな？私が弁護士として働いていた時の忙しさを考えても、決してそんなことはないと思うのだが？しかし、また、別の視点から考えると、いや、たしかにそうかも・・・？

■□■家族団欒の時間はこんな工夫から！しかし・・・■□■

多方面に活躍している人はやたらに「忙しい、忙しい」とは言わないもの。それは、常に段取りを考え、ムダなく行動しているからだ。逆に、段取りの悪い人ほど処理しきれない仕事を抱え込み、いつも「忙しい、忙しい」とぼやいている。本作を観ていると、宅配トラックの事業主となったリッキーは、他人のルートまで引き受けたこともあって、かなりアップアップ状態。また、最初から少し無理筋と思われた妻アビーの仕事量もアップアップ状態だ。そんな中、セブの反乱(?)のため、家族が口論する時間をとらなければならなくなったのは、ハッキリ言って時間のムダ。そんなケンカをする暇があるのなら、早く寝て翌日の英気を養った方がマシだ。大切なのは時間の使い方、家族の団欒も、ちょっとした時間の使い方の工夫から生まれるのでは・・・？

そんなことがスクリーン上に表現されるのは、学校が休みの土曜日の配達に、ライザがリッキーの車に同乗して配達を手伝ったこと。そのおかげでこの日の配達は無事だったし、父娘間の交流も深まることに。また、ライザはチップまでもらえたから大喜び。さらに、その心の余裕から、リッキーとライザはアビーとセブのためにテイクアウトのインド料理を買って帰ったから、その日の夕食は久しぶりに家族4人がテーブルを囲むことに。そうそう、いつもこんな時間の使い方の工夫をすべしといわけた。

ところが、そこにアビーに介護先から「夜のヘルパーが現れず困っている」との連絡が入ったため、アビーは出かけなければならなくなったが、そこでセブが「父さん、パンでみんなで行かないか」と提案。それを実行したところ、アビーの仕事を兼ねた道中の車の中は、思いがけず家族団欒の楽しい夜のドライブに化けることに。これこそ、時間の使い方の工夫の真骨頂だ。多くの事務員を使い、さまざまな分野で弁護士業を45年もやってきた私には、そのことが実によくわかる。たしかに、フランチャイズ制での独立した宅配ドライバーは成果主義だから、マロニーが言うように「勝つのも負けるのもすべて自分次第」。そうだからこそ、その競争の中で、人よりも優れた時間の使い方の工夫が求められる

わけだ。サラリーマンなら「8時間労働を守れ!」「勤務外手当を払え!」と要求し、また「給料をアップしろ!」「ボーナスをアップしろ!」と要求していればいいが、独立事業主は、他人に要求するよりも自分の工夫の方が大切。それは、囲碁・将棋・相撲・野球・ゴルフの世界も皆、同じだ。

そんな視点からみると、あの日の父娘2人での配達、あの夜の車での家族4人のドライブは実にいい時間の使い方だったが・・・。

■このバカ息子にうんざり! これも社会が? いやいや! ■

「好邪魔多し」とはよく言ったもの。これはある意味でコトが順調に進んでいる時こそ、逆に十分用心する必要がある、という注意喚起の言葉だ。しかし、映画ではドラマ性を増幅させ、主人公を幸福の絶頂から奈落の底に突き落とす直前のストーリーとして“好事”を描くことが多い。そう考えると、90歳を越えたケン・ローチ監督が本作中盤で4人家族の束の間の幸せぶりをみせつけたのは、きっとその直後に彼らを奈落の底に突き落とすための高等テクニク!? そう思っていると、案の定・・・。

私が本作のセブと同じ16歳の時。それは当然反抗期だから、よく父親と対立したが、本作のリックと違って私の父親は暴力を奮っていた。したがって、力ではまだ適わない私は、仕方なくそんな父親に屈服。その鬱憤をあちこちにぶつけていたが、それは私の場合、一人で行く映画だったり、将棋、囲碁だったり、少しだけレベルの高い卓球と、かじったばかりのサッカー、柔道等だった。しかし、本作のセブはそういうレベルの反抗ではなく、家族で楽しく過ごしたあの晩の翌日には、学校でケンカをして相手をケガさせていたからアレ・・・。校長から呼び出しを受けていたにもかかわらず、それにリックが遅れたこともあって、セブは14日間の停学処分を受けてしまった。そこで、リックはマロニーに「家族がガタガタなので1週間休ませてくれ」と頼んだが、マロニーからは「自営だから代わりを探せば済むことだ」と突っぱねられることに。それはつまり、代理のドライバーを立てられなければ、契約通り1日100ポンドの罰金を課せられることを意味していた。そんな現実の前にやむなくリックはいつものように出勤したが、今度は警察からセブが万引きをしたという電話が入ったから大変。さすがにリックは、マロニーから「制裁を覚悟しろ」と罵られながら警察に駆けつけたが、そこでセブは反省するどころかますます反動的になっていたからアレ。いつから、また、なぜセブはこんなバカ息子になったの? ケン・ローチ監督の主張では、ひょっとしてこれも、リックを忙しく働かせているフランチャイズの宅配ドライバーのシステムや、そんな格差を生んだ社会が悪いと言うの? まさか、そうではないはずだ。私としては、これはフランチャイズの宅配ドライバーのシステムや格差社会が悪いのではなく、反抗期のまっただ中にあるセブの出来が悪すぎるためと言わざるを得ない。しかして、私はこのバカ息子にうんざり!

■□■ここまで反抗？妹の健気な行動は？家族の再生は？■□■

去る12月13日に観たトルコの巨匠ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の『読まれなかった小説』（18年）は、父子の確執と再生をテーマにした難解な長編会話劇だったが、そこでの父子の確執は深刻でも暴力を伴うことはなかった。それと同じように（？）本作でも、リッキーはこれまで子供たちに暴力を振るったことのない父親だったが、昨日はついに万引き事件の反省が全く見られないセブに対して暴力を振るうとともに「出ていけ！」と怒鳴ってしまったから、さあセブは？小学生時代に父親の暴力に思いをしてくる私も、父親になってからはリッキーと同じようにこれまで一度も2人の子供に暴力を振るったことはないが、「出ていけ！」と怒鳴ったことは何度かある。それくらい父子ゲンカはどこの家庭でも1度や2度はあるはずだが、本作では、あの父子ゲンカ後のセブの行動はどのように見てもやり過ぎ！？もっとも、そう言えるかどうかは、昨日のリッキーの暴力の可否だけではなく、そこからずっと遡り、リッキーがあの日あの決断をしたことの是非までしっかり考える必要がある。

ここで1つだけつまらない指摘をすれば、車のキーは普通1本だけでなく、スペアキーがあるのでは？もしそうだとしたら、本作のように、その翌朝、セブがバンのキーと共に消えていたとしても、本作のような混乱は起きないはずだ。もっとも、本作ではキーがなくなったからバンに乗れないことが問題ではなく、誰が、何のために、キーを持って行ったのかが問題。しかして、ケン・ローチ監督はそこからクライマックスに向けて意外な犯人を登場させてくるので、それに注目！リッキーはキーを盗んでいったのは当然セブだと考えていたが、もしそれが間違い（濡れ衣）だったとしたら、リッキーはどう謝罪すればいいの？そして、セブはそんな謝罪を認めてくれるの？

ケン・ローチ監督が描き出す本作ラストの静かなクライマックスについては、そんな視点からあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。ちなみに、本作の邦題は『家族を想うとき』だが、原題は『Sorry We Missed You』だから、大きく違っている。しかして、本作のクライマックスを観れば、あなたはどちらのタイトルの方がより相応しいと考える？

2019（令和元）年12月27日記